

3rd annual meeting of APCGCT 報告

2017年10月21日終日かけて同学会が、山東省青島市のシャングリラホテルで開催されました。これは8th China Medical Biotech Forumの一部として開催されたもので、遺伝子細胞治療以外にも同時開催された学会があったため、参加者が分散し、さほど多くの出席者がいたわけではありませんでした。しかし、中国からの発表はレベルが高く、もはやアメリカ遺伝細胞治療学会のシンポジウムと同じだと思いました。なお、外国からの発表者は、日本(当方)韓国(Chae-ok Yun) 豪州 (Jim Vadolas) で、中国からの発表者は11名でした。

外国から帰国された研究者、外国に居て中国で研究室(研究棟)を持つ先生方が活動されている中国の大学(研究所)の設備の豪華さには、いつものことながら驚かされます。また北京の李定鋼教授は、遺伝子治療の病院(北京燕北医院)を来年5月には開院するという事です。企業もバイオに投資を始めており、広州市政府系の投資会社も同市にバイオポリスの設立の希望を持っているという具合に、中国は世界の工場から脱して、次世代の産業育成に熱心という印象が伝わってきました。日本でも新しい風が吹くと良いのですが....。

来年度のAPCGCTが未定であり、可能であれば来年度も中国でお願いしたいと当方が述べたところ、広州と重慶の企業が資金提供をするということになり、結局両者が協議の上、重慶が降りて広州に決まりました。今回の主催者の黄文林教授によれば、広州の2社から多額の寄付(100万元:この金額は中国では学会実施には十二分の資金だそうです)が決まったということで、黄教授も驚かれておりました。なお、時期および主催者は今後協議をするということです。また、今後APCGCTを運営するにあたり、理事を決めたほうが良いという意見がありました。NPOの理事とは異なる意味で、学会上の理事と捉えれば確かに各国から担当理事を出したほうがよいかと思います。ただ、この理事選出の話は、これ以上は進展しませんでした。なお、APCGCTの事務は日本が担当すると述べたのですが、具体的な話は進みませんでした。この事務局という言葉の意味が、日本では事務作業を担当するという意味ですが、中国では首脳部という意味ですので、当方も深入りを避けた次第です。

以下は当方の印象です。黄先生は結構熱心にやってくれており、彼の部下の方はレスポンスが良いので、当面中国内部は彼に任せて、サポート体制を取れば中国内の連携はうまくいくように思います。日本・豪州・韓国内の連携はOKですので、中国が回り始めれば、APCGCTは軌道に乗るかもしれません。ここ1-2年が大切で、中国内部のネットワークの一層の拡充を図る必要があるかと思っています。

(文責: 田川雅敏)